

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

宣教と適応：グローバル・ミッションの近世：
共同研究：近世カトリックの世界宣教と文化順応

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008493

15世紀末以降、アジアやアメリカに派遣されたカトリック教会の宣教師は、しばしば赴任先の国々の言語や知識を学び、規範や慣習を身につけ、地元社会に溶け込むことで、現地人の改宗を促そうとした。本研究では、宣教師のこの異文化適応に焦点を当て、ローカルな事例の比較とヨーロッパの文明観・人間観の検討を通じて、その歴史的意義を解明する。この小論では、計画中の成果論集の概要を紹介したい。本稿執筆時点での構成案によれば、論集は7つのセクション、14本の論考からなる。以下、各セクションの目的を説明する。

「宗教」をめぐる対話

近世カトリックの宣教師は、被造物である人間が創造主を希求し崇拝するのは自然と考えており、人間がいるところにはどこでも「宗教」を見出した。彼らの考えでは、アジアやアメリカの人びとの信仰心は悪魔の介入や祭司の姦計により創造主以外に向けられており、「偶像崇拜」として排斥の対象になった。しかし、信仰心自体や外面的な崇拜形態は、キリスト教会の建設に流用可能とみなされ、適応の対象になった。他方、現地人も彼らなりのやり方でキリスト教を解釈し、宣教師の要請に戦略的に対応した。その対応はヨーロッパ人と

の関係の変化に応じて排斥と適応の両極を揺れ動いた。

このセクションでは、宣教師と現地人のあいだの「宗教」をめぐる対話と交渉を検討し、両者の適応戦略をそのなかに位置づける。また、この対話と交渉を通じてアジアやアメリカの人びとの「宗教」概念、ひいてはヨーロッパ人のそれが変容した可能性についても考察する。

理性と科学

キリスト教は古代ギリシア・ローマの知的伝統と対峙しながらその教義を合理化していった。その結果、信仰と理性の一致が強調され、唯一神の存在や靈魂の不滅は理性により到達可能な真理とみなされた。キリスト教のこの合理性は、近世以降、宣教師がアジアやアメリカの知的伝統と対峙したとき、ふたたび強調された。その際、理性は一種の普遍言語とみなされ、それを介してキリスト教の教理が現地人にとっても真理であることの論証が試みられた。信仰の合理性を重視する宣教師はしばしば科学を援用した。全宇宙は神の作品であり、その構造を読み解くことは作者である神を知ることにはほかならない。宣教師がヨーロッパの科学的知識を広めたのは、それが現地人をキリスト教に導くと考えたからである。

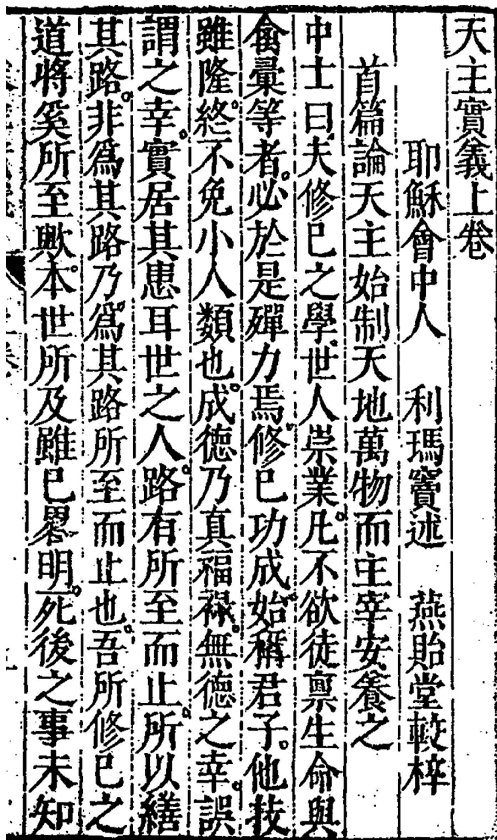
このセクションでは、理性と科学に訴える宣教師がアジアやアメリカの知的伝統をどう受け止め、現地人とどのような交渉を繰り広げたかを検討する。宣教師は在来の伝統をしばしば高く評価したが、誤謬として論駁する場合でもその伝統に深く傾注し、そこから折衷や総合の試みが生じた。他方、現地人は自分たちの価値や利害に即して宣教師に対応し、彼らの科学的知識を自己の目的に流用した。このずれの違いの構造を解明することも、このセクションの目的である。

翻訳と齟齬

キリスト教の教理書や聖人伝を現地語に翻訳したり、その現地語版を作成したりすることは、宣教活動の重要な一部だった。この作業は読み手の言語構造や文体表現、概念体系への適応を要求したが、それゆえキリスト教を過度に現地化し、その本質を損なう危険を伴った。そのため、宣教師は読み手にとってのわかりやすさと正統的教義への忠実さとのアポリアに引き裂かれ、試行錯誤を繰り返すはめになった。

現地語の宗教書の作成には現地人の協力が不可欠だが、彼らには彼らなりのキリスト教の理解があり、協力の目的があった。その理解や目的はしばしば宣教師のそれと齟齬を来した。また、宗教書の生産や流通、保管が往々にして現地の権力者の統制下に置かれたため、宣教活動が制約されたり、本来の目的から逸脱させられたりした。

このセクションでは、現地語で作成された宗教書をヨーロッパの典拠や宣教現場の状況を考慮しつつ検討し、そこに適応と呼ぶものがあつたのか、あつたとすればその内実は何であり、それはいかにして生じたのかを解明する。



宣教師マテオ・リッチが作成した中国語の教理書『天主實義』の一頁。出典：李之藻編『天学初函』（1628）理編所収の重刻本（燕貽堂較梓版）。

言語における普遍と特殊

近世カトリックの世界宣教は、従来知られていたよりはるかに大きな人類の言語の多様性を明るみに出した。宣教師はその多様な言語を習得し、文法書と辞書を作成し、その言語で福音を伝えた。宣教師によるアジアやアメリカの言語へのこの適応は、しかしながら、それらの言語をヨーロッパの規範に適合させる試みでもあった。その規範とはアルファベットであり、ラテン語文法だった。宣教師は非ヨーロッパ言語、とりわけ無文字言語を「野蛮」とみなし、それらを彼らが普遍的とみなした音韻体系と文法規則により整序しようとした。その目的は、バベルの塔の崩壊に伴う言語の混乱を修復し、神と人間のコミュニケーションを再確立することだった。

アジアやアメリカの言語をヨーロッパの規範に合致させようとする宣教師の試みは、それらの言語の固有性と抵触せざるをえない。原理的に不可能なこの試みが最終的に行き着いた先は普遍幻想の放棄だったが、そこへ至る過程で宣教師はさまざまな適応を試みた。このセクションでは、適応を拒否しながらも適応を繰り返す宣教師の言語学的試行錯誤を検討する。

美術を介した交渉

プロテスタント諸派が信仰をもち立てる美術の効力を否定したのに対し、カトリック教会はその効力を再確認し、宣教に活用した。アジアやアメリカに派遣された宣教師は、新築の聖堂を美術品で飾り立てるとともに、工房を開設し、現地人の職人を養成した。宣教現場における美術制作は、大枠においてヨーロッパの規範や技法、制度の移植だったが、現地の要素もしばしば取り込まれた。このセクションでは、美術における現地文化へのこの適応の意義を究明する。

アジアやアメリカで制作された美術品は、現地で流通するのみならず、ヨーロッパにも輸出された。現地特有の材料やモチーフは異国情緒を醸し出すものとして評価され、そうした特徴をもつ美術品はしばしば王侯貴族のコレクションに加えられた。ここでは、美術における適応の意義を、美術品を収集し享受したヨーロッパ人の視点からも考察する。

反適応

近世カトリックの宣教はつねに適応主義的だったわけではない。むしろ、いかなる適応も許されない領域が存在した。その代表例は「偶像崇拜」と「野蛮」である。後者は人間の自然本性に反する行為全般を指し、とりわけ山や森に分散して暮らす「野蛮人」の存在様態が排撃の対象となった。アメリカ全土で実施された集住化は、「野蛮人」を強制的に町に集めて共同生活を送らせる政策であり、宣教の準備段階として

彼らを「人間化」する措置だった。

「偶像崇拜」の撲滅と「野蛮人」の集住化は反適応措置の代表例だが、何に対してどこまで適応が許されるかについて宣教師のあいだでつねに明確な合意があったわけではない。適応をめぐる意見の食い違いや論争が生じることはまれではなく、その論争はしばしば修道会同士の対立へと発展した。

このセクションでは、反適応主義的な宣教方針や適応を否定する宣教師の見解を検討し、近世カトリックの異文化適応が抱えていた問題点を浮き彫りにする。

ヨーロッパ思想の展開

宣教師は赴任先の国々の生活様式やキリスト教会の建設について報告や書簡を執筆し、また現地語の哲学書や歴史書をラテン語などに翻訳してヨーロッパに送付した。それらの著作や翻訳のいくつかは刊行され、ヨーロッパの知識人のあいだに広く流通した。非ヨーロッパ世界に関するそれらの情報は、近世以前に入手可能だった情報を質量ともに凌駕しており、従来自明視されてきた世界観・人間観への批判的省察を促した。適応方針を支持する宣教師は、「異教徒」の生活様式が人間の自然本性にかなっていることや、彼らが理性により到達可能な宗教的真理を認識していることをしばしば強調したが、そうした言説は「異教徒」にとってのキリスト教信仰の必要性に疑問を呈し、宣教の根拠を掘り崩す危険をはらんでいたため、しばしば物議を醸した。

このセクションでは、宣教師がもたらしたアジアやアメリカの国々の情報、とりわけその肯定的イメージが、ヨーロッパの知識人によりどう受け止められ、政治的・哲学的・神学的論争にどのように使われたかを究明する。そして、そうした論争を通じてヨーロッパの文明観・人間観がどのように変化したかを検討する。

全体としてみれば、本論集は、近世カトリックの異文化適応は一部の開明的な宣教師が主導した例外的な宣教方針であるという従来の見解を改め、それが双方向的な異文化交渉の必然的産物だったことを示す。そして、宣教師の適応が当時のアジアやアメリカ、ヨーロッパの諸社会にもたらした諸変化の軌跡を辿り、その意義について考察する。



「聖グレゴリウスのミサ」、1539年、羽根モザイク／板、68 × 56 cm、オシュ美術館（フランス）。宣教師ペドロ・デ・ガンテと先住民首長ディエゴ・ウアニツィンの監督下、メキシコで制作された。出典：Donna Pierce et al., *Painting a New World*, Denver Art Museum, 2004.

さいとう あきら

国立民族学博物館人類文明誌研究部教授。専門は文化人類学、ラテンアメリカ研究。単著に『魂の征服—アンデスにおける改宗の政治学』（平凡社 1993年）、共著に『南米キリスト教美術とコロニアリズム』（名古屋大学出版会 2007年）など。